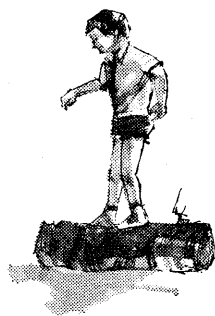


## 発達異常と保育

「発達上のハンディキャップ」や「異常」のある子ども、たとえば脳性マヒとか、難聴とか、それから、どる子ども、口蓋裂の子どもたち、私は、そういう子どもを見ていて最近感じていることを申し上げようと思います。

### ふつうにある「発達異常」の考え方、見方

こういう子どもたちについて、今から申し上げますから、全部聞いていただくと「ああそうか」と思われるところもあると思います。脳性マヒとか、ろうとか難聴とか、めったにこういう子どもはいないんですが、こういう子どもたちに、たまたま接してみ



### 田口恒夫

ますと、その子たちに非常によく共通していることがあるんです。まず、もともと子どもには、何かしら「欠陥」というのはちょっと大げさですが、平均的な子どもと比べると違った面があるんです。そしてそこから先が面白いんです。それについて親は、どうしてよいかわからなくて困る時期があるんですね。保育者としてそういう子どもを預かれば、保育者の方も困ります。これから、児童学科では、赤ちゃんを預かって乳児保育をする計画があるんですが、そうすれば、われわれもきつと困ると思うんですね。「何だろう。この子は。どうしてこんなに泣くんだろう」「どうして、他の子は泣かないのに、この子だけ泣くんだろう」と、迷

うことがきつと出てくると思うんです。

どうせ人間は、全部赤ちゃんを理解してやっているわけではないので困ることはけっこうなんです。困った時に、そのわけについて、親が気がつき始める。「この子、ひょっとして目が見えないんじゃないか」「やっぱり、目が見えない」「さあ大変だ」と思うわけです。「この子、ひょっとして足が動かないんじゃないか。動かそうと思っても動かない性質があるんじゃないか」「どうもやっぱりそうらしい」ということに気がつく。

そして、それを『過大視』して（適当な言葉が思いつかないの、こうしておきます）——もうそれが子どものすべてだと思ってしまうのです。この子は、目が見えない。目が見えないということは、もう大変なことで「その子は、足は動くんですよ」といっても、もうそんなことに気がつかない。目が見えないことが、その子のすべてだと思ってしまうんですね。そして、そのために何をしようかと考える。「目が見えないんですが、どうしましょう」「目が見えない子の保育は、どうしたらよいでしょう」「目が見えない子の教育は、どうあるべきでしょう」と、目が見えないということが、その子の名前にかわってしまうのです。

「うちに、良子ちゃんという子がいるんですが、この子の教育計画をどうしましょう」という聞き方が普通ですが、「うちに、目が見えない子がいるんです」というこれがすべてであるかのようになる傾向があるんです。それは人はみな、追いきまれるとそ

うなるのですね。そうなのはいいけないとかいうのではなく、そうなりがちなんです。そして、そのための対策を考えると、すべての対策が特殊なものになり、特殊な訓練になっていくんです。目が見えないから、早く歩かせようとか字を覚えさせろだとか、すべてのやることなすこと、普通の子どもにやっているようなことをしなくなってしまうのです。すべて普通でないことを、せつせとし始めるのですね。

そして、その子は、目は見えないけれどその他のことは、普通の一人の子どもなんです。普通の一人の子どもとして、その子が必要としているものは、食べ物なんかは食べさせますが、その他の通常な子どもなら、誰だってやってもらっているようなことを、ついやることを忘れてしまふんです。あまりこつちが大きく見えてしまふものだから、目が見えないということしか見えなくなってしまう。そして夢中になって、特殊な訓練、特別な治療はないかと考えて、普通の子どもとしての保育を忘れちゃうんですね。

実際、「この子は、目は見えないんですが、普通の子どもと同じように、一人の子どもですから、少なくとも、普通の子どもが必要としている保育サービスが、この子にも必要です。そのほかに、目が見えないことに対する特殊な配慮も必要なんです。普通の子どもに授けている保育サービスを、この子にも、していただけますか」といって普通の幼稚園につれて行けば「目が見えない

んですか」「目が見えなくちゃだめですよ。もう危なくて」とか  
いって幼稚園が断わるんです。目が見えないという話を聞いただ  
けで、驚いてしまう。それをその瞬間極端に重大視して、「幼稚園  
に入れてくれ」というと「とんでもない」というんです。そし  
て、あとからその子は、目が見えないという以外に、どういう点  
をもった子でしたかという「ちょっと見なかった。聞かなかった、  
知らない」というんです。普通の子だったら「身長は何センチ位  
ですか」「いくつで歩き出しましたか」といろいろ聞かなくても  
しれないのに、その子が、目が見えないと聞いたら、驚いて、他  
のことは何も聞かないで帰してしまうことになりがちですね。

それで通常な子どもが受けるような保育の機会を与えられない  
ままに成長していく。そして、子どもの成長の上で、近所の子ど  
もたちとグループで遊ぶとか、保育園にいくとか、幼稚園にいく  
とか、兄弟仲良く何々するとか、そういう集団を通して、普通の  
子どもが獲得していくようなことは、この子の場合には、しばし  
ば全く与えられないのです。そして、特殊な訓練や特殊な教育を  
せつせとやられる。親が一生懸命、問題を「重大視」して、それ  
に対する対策を一生懸命考えますと、だんだん子どもが、まさに、  
それそのもの、目が見えないことそのもの、盲人そのものみたい  
になっていくんです。それよりほかに育ちようがないのです。

そういうことはほかにもあります。たとえば、どもりなんて、  
こっちが「本当に、この子どもりだなあ」と思い込んで、「ども

りだ」ということはたいへんなことだ」と思って、そういう目ばか  
りで見ていると、どもっている時しか見えなくなる。どもりじゃ  
ない時もあるんですが。「パパ、なんとかして遊ぼうよ」といっ  
た時には、どもらなかつた。「ママ、ママも来てよう」とども  
ったのだけが聞こえ、「まだどもっている」と思うのです。本気  
でそう思って、それを大きく考えて、それ以外、その子に何もな  
いかのように、そのことを重大視するのです。重大視して見てい  
ると、だんだんそうなっていくという傾向があるんです。おかし  
くなっていくんじゃないかと思うような特殊な訓練とか、教育と  
か配慮といったものだけがあって、普通のものがなくなっていま  
うんですね。そのために子ども自身が特殊化してくるから、世の  
中の人は、特殊視するようになる。

ろう学校の子どもなんて、手まねをしますが、大塚の駅なんか  
で、手まねをしていると、世の中全体の人が、その人たちを、今  
や特殊視するわけですから「きょう大塚の駅でね、おかしな子ど  
もが、手でこうやってね『アー』とか何とか声を出して、かわい  
そうだね、あの子たちは。いい顔しているのに」なんていう。も  
ともという子なんです。もともと普通の子なんです。たまたま耳  
が遠かったのです。ところが「あの子たちかわいそうだねえ。手  
まねなんかして、明るくしていたけど、おとなになったらどうな  
るんだらう。きっと、あのまま明るいままはいかないよ。おれた  
ちは、明るくさせておく方針じゃないんだから」とこういういい

方、考え方をして特殊視すると、だんだんその子の成長に伴って、その子は、普通の社会に適応できないようなおとなになっていくんです。

そうしておいて「なるほど、ろうあ者というのは、しょうがないものだ」とか、「盲人というのは、本当にあんまさん以外何にもできないもんだ」とか、「精神薄弱というのは、やっぱり困るもんですね」なんて、もともと困りものだったようにいうのです。そしてこんなにたくさん困りものがいたら、どこか高崎の山の方に、大コロニーを建てて入れたらどうですかと、そういう「福祉」を考えるのです。そして、どこかに施設ができて、「いやそれはけっこうでした」なんていっている。そういうものが共通して、全部そうですね。

### のぞましい問題のとらえ方

「これは困った」と思ったら、すぐそれを正しくしていくことを考えていかなければ——。正すということではないかもしれませんが、子どもなんか見えますと、なんとかしなければならいなどと思うんです。どこで正すかという、まず子どもに欠陥がある。たとえば、脳性マヒの子は、少し足が悪いとか、盲という状態で生まれた子どもは目が見えないとか、口蓋に裂のある子どもは、六百人に一人生まれるとか、そういうこと自体は、今のところどうしようもない。そういうものなのです。ちょうど、日本人

というのは黄色人種でこれはどうにもならないのですから。もう少し白かったらよかった、黄色人種をなんとかしなくちゃ幸福はこないといったって、何とかなりませんね。なんともならないことは、そのままでけっこうだと思えます。限界の中で、方法をさがすよりしかたがないのです。

これは、しばしば防げないのです。防ぐための努力は、一方ではしているのですが、重症心身障害児が生まれないようにするために、母親の健康管理をよくしましょうとか、毎月一度、保健所に行きましょとか、保健所に行くときに、ころんで流産してしまったりとか、何をやっているんだかわかりませんが、よかれと思って一生懸命やっているんです。それで保健所が広まってから、重症心身障害児が減ったという話も聞きませんが、やっぱりある種のものには防げない。そうすると、次は親が迷うんです。たとえば脳性マヒの子とか、知恵おくれの子とか、ろうとか、子どもがどもり始めたとか、口の中をあげたら、口蓋裂で、口の中がわれていたとかすると、親がびっくりしてしまふ。

親に「びっくりするな」というのは、大変いい考え方です。たいていの親は当分びっくりするのです。それというのはそういう異常がどうして起こったのかということについて知識がありませんので。私どもに、十分知識があるというわけではありませんが。世界中どこのおかあさんでも、例外なく、「どうしてこんなことが、うちの子どもに起こらなければならなかったのでしょうか

か」Why did this have to happen to us? というんです。生まれてみたら、三つ口でした。「奥さん生まれましたよ。だけれどね、三つ口なんですよ」「冗談じゃありませんよ。三つ口というのが世の中にいることは知っていましたけど、うちとは関係ないことです。うちの子が三つ口とは」「どうしてうちの子に起こったんでしょう」と思い、誰かに聞こうと思うんです。まあお医者さんに聞くと、「それは、八百人に一人位あるんですよ。それは、ちょっと運が悪かったですね」「運が悪かったといっても交通事故ではないんですから」「何があったんでしょう。何が悪かったのでしょうか」「私が悪かったんですか。それとも、主人の方にそういう血統があったんでしょうか。それを隠して結婚したんでしょうか」などいろいろ考えるんですね。そして「ぎょっ」としてしまふ。「ぎょっ」とさせないためには、どうするかということ、一方で考えなければならぬことです。

口蓋裂は、八百分の一であたる。脳性マヒの子どもというのは千人に二人位そういう子どもが生まれるようになっていゝんです。年賀はがきの三等賞か四等賞位の割で、誰かに当たるんです。その時、「ああ、当たっていましたか。それは」ということになればいいんですが、たいていの人は、びっくりしちゃう。ところが、親がびっくりしていたら、「いやいや、おかあさん、いくらびっくりしても、どうしてこんな子が、うちに生まれたかいくら神さまに聞いたって、先生に聞いたって、大体これは、わか

らないんです。しょうがないんです」ということを、誰か話してくれて「実は、きょう、日本中に何人の子が生まれて、そのうち何人は、こういう子が生まれているんです。お宅だけじゃないんです」ということを聞くだけでも、ずいぶん気が楽になるんですね。けれど、そういう災害が、ふりかかってきて、世界中が、こんなふうになっているなんて思わないで、自分だけがと親は思ってしまうんです。世の中に、そういう人が、いっぱいいる、そういう情報サービスを作るだけでもずいぶん違うんです。

一日早くわかれば、親は一日早く、子どもの育て方が変わってくる。「あつ、そうですか。要するに今、おっぱいを上手に飲ませることをしていれば、半月後には、こういう手術ができ、一年たてば、なんとかさんの坊やみたいになって、大学へ行くようになるば、何とかさんのお兄さんみたいになる。だから、今は、おっぱいを飲ませることを考えればいいんですね」と思う。そんなことを思いもよらず、ただ子どもを抱いて「どうして、こんなことになってしまったんだろう」と思って、子どもの方はおなかがいゝて何か食べさせてくれればと思っているのに、親の方は、腹が減っていることより、口の中をあけて見ている。そこで、誰かが飛んでいって、たとえば「そういうことなら私知っています。この町には、何人いて、なんとかちゃんの坊やは、小学生です。見通しとしてこういうことがあるんです。だから、今あなたがやる大事なことは、こういうことです」と教えてくれる人がいると

いいんです。それが、全然いいんです。誰も、そういうことをしない。ずいぶん薄情なものです。そういう子どもを育てた人が、世の中にいっぱいいるし、そういう手術をする人も、たくさんいますから、ただの気安めをいうだけでなく、世の中は今こういう状態になっています。おかあさんが、今こういうことを努力していれば、こういうことになります。あなたにやる必要がある、ということをお教える人がいないんです。だから親は、当然あわててしまう。そのことばかり考えていけば、だんだんそうとは思わなくなってしまうのです。しょっちゅう、子どもの顔を見ちゃ「困ったな」と思っています。

子どもの方は、全然そうじゃないんです。三つ口の子なんか、近くに行って「バー」というと、口が「ニャー」とさけたりして、初めは、気持が悪いけど、二、三時間もすれば、みなさん全然驚かなくなります。三つ口の子の笑顔は、実にかわいいと、本当にそう思えるようになります。「この子は、本当にいい子だねえ、だけど三つ口という個人差が他の子とちがうことである」ということは、つき合ったらすぐわかるのです。本当に、そういうもののなに、親は、そう思えないから、びっくりして、人に見られないように隠すんです。金曜日におばあちゃんが来るといふから、こんな子を見られると大変だ。なんとかしなくちゃ。そんなことなかったかのように縫ってしまおうと思うんです。大変迷っている時には、誰も助けにこないんです。だんだん過大視して、

そのことばかりしか考えなくなる。そういう時に、「この子も、普通の子なんです。ただ足が悪いんです」「目が悪いんです」という個人差をもっているという適当な「重みづけ」、過大評価や過小評価でなく適評価。――目が見えないとは、こういうことです。こういう問題があります。目が見えない以外の点では、このように普通なんです。目が見えないというほかに、人として子どものもっている問題をバランスをとって話をしてくれる人がいるといいですね。すると、親はずいぶん助かります。子どもの方には目の見えない普通の子どもとして保育してくれる人がいなくてはなりませんね。

脳性マヒだと、むやみに訓練させられる。一生のスタートは、訓練また訓練なんです。訓練をする子はいいい子で、やる気のないのは悪い子でという鉄則みたいのがあるんですね。そういう生活に、その子は入っていく。そして、本当に、普通とは非常に違った人間に育てられてしまう。世の中の人は、みな、それが一番よいと思っているんです。足の訓練をしたり、手術をしたり、何かそういう普通の子の歩く道とは違う道を歩んでいる。普通の平均的な子もたちとは、もう顔も合わせずにおとなになっちゃうということが多いです。何とか施設にいて、何とか病院にいて、何とか職業訓練所にいて、十八歳で出てきて、そこで初めてほかの人に合うのです。目の見えない子どもたちだったら、目の見えない子以外の子とつき合ったことがないのですから、目の見え

る人の社会の中で、どうつき合ったらよいかわからないということになるんです。目の見える者は、「なんだ、あいつは、目が見えないのか。めくらか、困ったものだね」と思い、もう本当に相いれないように育てちゃう。だんだん、普通じゃなく育てちゃって、そして、普通じゃないから「だめだ」という差別をする。そういうことは、とてもよく共通していると思います。

こんどは、一つ一つの問題について、簡単に解説してみたいと思います。

### ◆脳性マヒについて

脳性マヒという言葉は、英語を訳したもので、昔は、脳性小児マヒといってドイツ語を訳したのですが、ふつうの小児マヒというのは、その後ポリオともいいましたが、ポリオというのは伝染病で、脳性小児マヒというと何か伝染病と間違われるので、脳性マヒとしました。

どういうものかといいますと、人間の脳ができてくる——受胎した時はたった一個の細胞だったのが、だんだん分裂して十ヵ月もしないうちにこんなに大きくなる。ものすごいいきおいで「ワー」と大きくなるんです。その途中で、ある種の細胞は、分化して脳になるわけです。その途中では、ずいぶん激しい建設工事が起こっていて、どんどん細胞が分化して、それが、一つ一つがトランジスターのようなもので、その間のつなぎの配線ができて、

それができると、みなさんの脳のような構造になるんです。ところが、脳のできる途中で、何か工事の手ぬかりが起こって、セメントが足りないとか、トランジスターの足が一本足りないとか、なにかそういう、体を動かすことに関係のある回路に失敗がおこる。たとえば、ひじを曲げるには、曲げる筋肉には、「動け」という命令を出して、伸ばす方には「休め」という命令を脳が計算して出している。それは、相当ちゃんとした配線図ができていて、どこもショートしていない時だけ、できるのです。赤ちゃんの時は、まだ、その絶縁ができていませんから、手足がいっしょに動いてしまったりしますね。ある種の人たちは、その運動に関する配線を作っている時期に、酸素が足りなかったりしますと、そこのできが悪くなりまして、ひじを動かそうと思ってもちがう方が動いてしまったりしてしまう。そういう仕掛けに脳ができてしまっているんです。脳ができてくる途中、実際には、受胎してから、出産、および出産一〜二年後を含めて、その間に、何かわけがあって思うように手足を動かすことができなくなってしまうのです。脳の運動をつかさどる神経回路の配線が、普通とちょっと違う子どもを脳性マヒというのです。

そういう子どもたちに、いくつかのタイプがあります。主な二つをあげると、一つは、痙直型といって、手を曲げようと思っても、いっぺんに、曲げる方と伸ばす方と両方に力が入ってしまい、曲がりにくくなる。曲げようと思っても重たくて、抵抗があ

る。体中の筋肉が、抵抗が強い感じを痙直型というのです。これは、足の方に多いのです。もう一つは、アテトーゼ型。これは、どこか動かそうと思うと、思いがけないところが動いてしまおうとか、ちょっと緊張すると顔がゆがんでしまおうとかです。近ごろでは、こういう人も町を歩いています。普通の赤ちゃんだったら、目の前にものがあつたら、手でつかむことができるし、親が、何か持たせれば持つ、すぐできなくても、期間をかければひとりで覚えていくものです。それが、この子たちにとっては、一生の難事になるんです。目の前のものが取れない。「早く取れ」なんて緊張させられると、こわばってとれない。そういう人たちは、そういうようにできてしまっているんです。顔をしかめてやつても、それがやつとなんです。しかし、とうとう歩けるようになってたりする。全然歩けない人も大ぜいいます。寝たきりで、寝返りもできない人もいます。そういうのは、重症児というのです。

こういう子どもは、生まれてすぐ次のような状態です。未熟児であることが多く、痙直型では、生まれてしばらく泣かなかつたり——いわゆる仮死状態です。それから黄だんが強く出る。二三日目から出て六十日位続きます。また、おっぱいを吸う力が弱い。そこで、おかあさんはなんとかおっぱいを吸わせなくてはと思う。このころは、幸い、脳性マヒだということはわからないんです。わからないということはけっこうなこと、知ったら、もっと驚いてしまう。弱く生まれたとか、早く生まれたとかでなかなか

かわからないので、一生懸命おっぱいを飲ませているんです。どうやらおっぱいが飲めるようになって、その次に、問題になるのは、運動機能の発達が遅れることです。何ヵ月になっても首がすわらないということがよくあるんです。おしめをかえようと思つたら、足の開きが悪いとかで気がついて、保健所に行く、「これは、股関節脱臼じゃないか」といわれる。または「整形外科へ行つてみなさい」といわれ、このことで、非常に神経を張り始めるころに「これは脳性マヒです」といわれる。

脳性マヒという言葉を聞くと、親はとたんに腰をぬかしてしまふのです。精神薄弱、脳性マヒといわれて「ああ、そうですか」という人はいませんね。「そんなはずがない。そんなことが、どうして起こつたんだろう」と思い、病院の帰りに、どこかに飛び込んで死んでしまおうと思つたりするんですね。大半の人がそう思うのです。それから、もっぱら整形外科のお医者さんの話を聞くのです。整形外科は、ただの医者で、特に、手足の関節とか骨とかの問題が主な仕事です。たまたま足が動かない、首がすわらないということで整形外科へ行くのですが、脳性マヒの人たちは、足が悪い、骨が悪い、関節が悪いのではありませんから、整形外科でなく、もつと脳のわかる人に話をきけばよいのですが、そういうわけだか、歴史的に、脳性マヒを世話するお医者さんがいなかったんです。世話をしている人は、慈善事業なんかで、子どもを預かる人はいたんですが、本当に育てるのにどうしたらよ



いか、本気で考える人はいなかったのです。

整形外科の高木先生という方が、明治時代にいました。私はこの人の直接の弟子なんですが、高木先生が、そういうことをやり始めましたので、日本では、整形外科が強いのです。整形外科医は、子ども全体を知っている人ではありません。関節のこと、骨のことはよく知っていますので、整形外科医がつくったのは、結局子どもの特訓訓練の処方箋なんです。足が悪い、動きが悪い、マッサージをした方がよいだろう。毎日薬を飲ませて、ボディビルみたいに重たいものをのせて、一、二とやるとよいなんて、そういうことを、そのまま、考えるんです。

P・Tという、不思議な商売をしている人がいます。理学療法士といって、この人たちは医者にいわれたとおり子どもたちにやらせるんです。子どもたちは、毎日毎日、痛い思いをしてやっている。「がんばらなくっちゃ大変だよ」「○○ちゃん、ホラおもちゃあげるよ」とおもちゃを上上げて、それがほしかったら、ここまでとどいてごらんとやって、とどくとまた上へあげて「やっとここまで上った。きょうはここまで」なんておもちゃをかたづけちゃったりする人たちなんです。それを児童学科の学生が見て、「あれはひどい。手を治すために一番ほしいおもちゃでつって、とうとうやらないなんて」と騒ぎ出したんですが、今までは、そういうことをいう人はいなかったものです。保育なんていうのは、この子たちにはないんです。でも収容施設を作ったら、初め

て、こういう子たちの保育が必要だといって、それも、ひまな時間には遊ばせるということで、保育の免許をもった人を雇うようになりまして。ところが、保母さんが、そういう子どもを見たことがないので、「私はこういう子どもを見たことがないですけれど……」という、経験のある医者が、「私は知っているから、私のいうことを聞け」ということで「安全に遊ばせなさい」「ケガをさせないようにしなさい」「むやみに手伝わなくて、子どもに自主性を育てなさい」とかいわれてやってきたわけですよ。

保育者として、この子を見ると、この子どもたちの一日の日課の中で行なわれている特殊な訓練とか指導は、人としてのその子どものパーソナリティーの発達にとって有害だなんていう人は、誰もいないんです。だから、整形外科医は気がつかない。気がつかないから今でもやっているんです。ですから子どもたちは、非常に特殊な環境や訓練でおとなになっていくんです。

どこの幼稚園でも、脳性マヒだと知らないととてくれるんです。「歩きぶりはおかしいけど実にはいい子なんですよ」といってとってもらう。とってもらってからはおもしろいことがある。ピョコピョコ歩いていてころびやすいけど、人はいいようだからといって入園させて二、三日ようすを見ていると。「あの子ころびやすいけど、できないこともあるけれど、三日前よりずいぶんよくなった。音を聞くとびっくりして倒れていたけれど、ピアノをならしてもころばなくなったね。たいしたものだ」と感心してくれ

るようになるのです。見ているとそうなるのです。保育者が見ていればすぐそうなれます。あまり見たことのないものは、びっくりするんです。見たことのないものは、いやなんです。

昔は、特別の訓練がなかったので、普通の幼稚園、学校へ行くものが案外多かったのです。そういう人たちの中で、今、詩を書いたり、本を書いたりしている人もいます。アメリカにも、ずいぶん昔の方ですが、カールソンという人が『この星の下に』という本を書いています。脳性マヒの人が書いた本ですが、この人は、自分自身相当重い脳性マヒで、五、六歳まで歩けませんでした。ところが、普通の学校に行つて、友だちなんか恵まれて、医学校を卒業し、お医者になり、肢体不自由児の施設長として、アメリカの「脳性マヒの父」として仰がれています。この人なんか、普通の学校へ行つたからよかったんですね。普通の友だちが、いっぱいいるから、何か困つたことがある時には、いろいろわかる人がいて助けてくれた。みなさんの幼稚園に、もしそういう子が入つたら、よく聞こうと思つても何をいつているのかわからないので先生は困つてしまふと思われるかもしれませんが、三日もすると他の子が、「お便所に行きたい」といつているんだよ」なんて通訳してくれる。いつも、先生より早く、子どもたちがわかるんです。いつもつき合つていて、人としての気持がわかるんです。そういう仲間がついてくると、中学、高校なんて案外簡単にすみます。そうするとけっこうたいした知恵があるわけでもな

く、手足の動きもひどいけれど、今は、立派になつてなんとか短期大学を卒業して、仕事をしているという人はずいぶんいるんです。りっぱな活動をして社会人として通用しています。

ところが、今は世の中が進歩していますから、メチャクチャに訓練します。全然違う訓練をするんです。そして、十八歳で終つて世の中へ出ると全然友だちがいないんです。どこへいつても、誰も知つてゐる人に会わない。そして、結局困るともとの施設に戻つて、先生に相談する。結婚問題から住宅まで、なにからなにもで、すべて昔世話になつた先生のところに行くんです。相談する人が、ほかにいないということですよ。

私が、昔世話をしてゐた子どもが、もう二十歳、三十歳になつて、昔よだれをたらしてゐた子がネクタイをしめて、訪ねて来たりします。「ああ、相変わらず無器用な歩き方だなあ。もう少し、何とかなつてゐると思つたのに」と思ひます。本当に六歳の時と、歩き方とか、しゃべり方とか基本的なことはほとんど変わつていないのです。黒人が、なんぼ洗つても黒いように、あれほど訓練しても、あれほど工夫したけども、同じような歩き方をしているんです。「今でも、しょっちゅう、尻もちをついてゐるか」というと「それは、ほとんどつかなくなりました」とか、聞いてみると、けっこうよくなつてゐるんです。昔は、十メートルごとに尻もちをついて、雪の日なんか、ぐしょぐしょになつて家に帰つてゐたのが、ほとんど雪道はこぼなくなつたとか、人前

では、よだれなんか出さないですよ、とかいってネクタイをしたおとなになっているんです。

「どういことが一番不自由か」と聞くと、ほとんど共通して「手足が不自由といっても、それは、もう慣れていきますから、それほど不自由ではありません。バスにも、電車にも乗れますし、駅の階段には手すりもありますし、大体困ることはないですよ」それは、恐るべきことですね。みなさんがもしそうなったら不自由でしかたがないと思うでしょう。この人たちは、前からそうなので、本当に不自由じゃないんですよ。「なんていっていても、一番困るのは、池袋からバスに乗ったとたん、バスに乗ってる人が、みないっせいにこちらを見る。それが一番困る」みんなが見るとね、みんながいっせいにバツを見ると、歩きっぷりが悪くなっちゃうんです。みんなが見ると、一瞬こわばってしまってそのままデンと倒れてしまうのです。みんなが見たりさえしなければ、まず悩みの九割がたはなくなってしまうんですね。なぜみんなが見るかというと、特殊だから、珍しいからです。本人は見られることが一番不自由なんです。

みんなが見ないようにするにはどうしたらよいかというと、それは自分の家族にそういう弟がいるとか、私みたいに、肢体不自由児施設に勤めるとかして、いつでも見ていると、目の前にいても格別興味はないですね。だから、もう少し世の中の人々が、慣れてくれれば、悩みの九割は、解決するんです。あとの一割は何か

というと、ペンを持つのに、何とかボールペンはいいけど、何とかは持ちにくいとか、それはちょっとしたこと、程度の問題です。それほど困ることはないですね。なにしろ一番困ることは、みんなが「サーッ」と見ることで、それからもう一つ困ることは、親が反対することです。職業につきたいから、試験を受けるという、「いやおまえには無理だ。とんでもない」というんです。結局、子どもが試験を受けて大学を卒業して、フランス語を翻訳する仕事なんかすると、初めて親が「この子にもできるんだな」と思うんです。

外に出ちゃいけないとか、普通の人とき合ってはいけないとか、普通だったら何でもなく認めてもらえるようなことが、身体障害だからといって、善意から、親やまわりの人にとめられて、させてもらえないことが残念です。それが不自由の残りの一割の半分ですね。本当に手足が不自由で、それで困るということは、まずゼロに近いくらいです。本人は、そういっています。ただ、見たところが、普通とうんと違うものだから、まわりの人がかわいそうがるんですね。

そこで、どうすればいいかというと、親が迷わないように「子どもがちょっと普通じゃなくて、お誕生日が来ても首がすわらないとか、二つになっても歩かないとかあっても、それ自体、脳性マヒというのは、そうなんですから」と話してあげるんですね。親が迷って、足の悪いことが、子どものすべてだと思っ、むやみ

に特殊視したり、特殊施設に入れたりしないで、できるだけ近所の普通の子どもと遊ぶ遊び方を教える。これが大事ですね。結局、その子がおとなになって困ることは、バスに乗って、パークと見られることなんですから。回りの子どもたちをそういう人たちがバスに乗ってきた時、パークと見えないようなおとなに育てていかなければなりません。それ以外、子どもの福祉は考えられないですね。

幼稚園のほかの子に、この世の中に、千人に二人は、こういう仲間がいるんだとき合わせる。子どもは、そういうのをすぐ友だちとして受け入れるもんです。それは見事です。ね。「あの子歩けないんだよ」「あの子立てないんだよ」とかみんな、ワイワイいじめるというか、やるんです。ちょっとやったらひっくり返って泣き出したとか、でも何べんやっても、そんなに面白いことではないので、しばらくすると子どもたちが悟るというか、その子も含めて、もっと面白いことをさがすんです。すごいしよに遊べるようになるんです。先生は、あわてて「いじめちゃいけないわよ。特殊なんだから」というけれど、子どもは、あまりそうは思わないのです。みんな寄ってきて、「その足見せてみる」「あつ、足に鉄が入っている」なんてひどい質問をするんですけど、「あつこういうふうにできているんだ。だからこっちは、あがらないんだ」とか「誰か手を貸さなければいけないよ」とかわかるんです。そして一週間もすると、その子の家に迎えに行つて、乳母車

を押すのは誰だとか、かつぐのは誰だとか役が決まって、けっこうみんな、ワッサワッサおみこしみたいに、かついできたりする。野球をする時には、その子をキャッチャーにするとか、なんか遊びの時は、どこにすわらせるとか子どもが考えるんです。

子どもたちが、仲間として、この地球社会の仲間として、自分たちの小さな幼稚園のクラスの仲間として、その子を受け入れて、やっていくのです。自分の家に、そういう子がいればやはりそうなる。お兄ちゃん、速く立派に走るけど、実は、弟は、重症心身障害児だから、遠足に行く時は、行きは、おとうちゃんがかついでいくとか、帰りは、お兄ちゃんとママがかついで、抱っこするとか、分担ができる。そして、その子は、その子なりに役割をもって、荷物の番をするとか、その子なりに遠足を楽しむのです。家庭という一つのグループで、その子をどうするかということが考えられる。その子が、いない方が都合がよいなんていう処理の仕方をするのではないんです。幼稚園とか学校は、いない方が都合のよい子はいないと断わるんです。地球社会には、絶対いるわけです。それなのに、その子がいないかのように、幼稚園を作り、小学校を作り、大学を作っているのです。そして十八歳位になって、やっぱりいましたからというようになる。もうそうするときは合えないんです。めんどうの見方がわからないので、善意はあっても、何してよいかわからないのです。

一番よいのは、だまって放っておいてジロジロみたりしないこ

とですね。誰も助けてくれなくても別になんとも思いません。

ただひっくり返りそうになったら、足を出して足をききえてあげればいいのに、ひっくりかえるまでみんな見ている。本当に最低のことかしらないんです。つき合ったことがないからです。子どもの時から、そういう子を交えて、相撲をしたり、サッカーをしていけば、そんな時、自分の方に倒れてきたらききえてやることを体得していれば、そういう人が、本当に助けを必要としている時に、「よし、それじゃ今、助けるから」という社会人になれる。

「小学校にあがった時に、クラスにそういう人が一人いて、いつもその子の足をもつとか、乳母車に乗せるとかしていたから、どういう時に、つっぱるか知っています」というように、知っている人がいれば、適切なお手伝いもしてくれるでしょう。少なくとも、ジロジロ見て、いやな思いをさせることはなくなる。そうすると、その子たちのもっているトラブルの九割はなくなってしまうのですね。

そういう子どもの集団指導ということを、池袋の肢体不自由児協会で始めました。通常の保育園や、幼稚園で行なっているのと同じように、手足の悪い子どもたちにも遊べるような遊びをしたり、その子たちが参加できるようなプログラムを考え、この子どもたちの行動そのものが伸びていくことを考えて、保育者が動いています。それは、本当に、ただの遊びなんです。何ヵ月も何ヵ月もやってもできなかった手の機能が、その中で、できるように

なったりするんです。考えてみますと、子どもの運動機能は、子どもが本当にやろうと夢中になってやった時だけ、覚えられるものであって、一、二と歩き方を教える。まず右足を出して、曲げてといわれて覚えたなんていうことは、あまりないんです。夢中になって、他の子とキャーキャーいって、ころばされたり、ころがしたりしているうちに歩けるんです。今まで、訓練でできなかったことが、ひょっとできるようになる。しかも、顔つきが明るくなって、友だちと遊べるようになるんです。おかあさんにくっついてばかりいたような子が、全然そうじゃなくなり、明日も幼稚園に行くんだと、はりきって、前日から用意したりしているんです。

脳性マヒの子たちが、何を必要としているか、よく考えてみると、普通の子どもと同じことを必要としているんです。普通の子どもと同じことだけすると、その子たちの今もっているハンディキャップの九割位なくなります。脳性マヒでない同年の仲間たちが、脳性マヒに慣れて、いっしょに話したり、幼稚園に行き、高等学校に行って暮してくれば、障害の九割かたはなくなるのです。一般の常識としては「字が書けない、すわっていられない、立つこともできないなら、学校に来たってこれはどうてい勉強になりませんよ」と先生がいう。でも、学校って何のためにあるか、よく考えてみる必要がありますね。そういう子どもであっても、運動会にも、遠足にも、学芸会にも参加する。その子を

含めた運動会がいつも企画されることになるのです。そうすれば、おとなの身体障害者でも、地域運動会に参加したりして、そういう人たちが参加できるもの考えた方が、より有意義ですね。子どもが、やり方についてまっ先に考えるんですね。それをおとなが、異常な人間はだめなんだと初めから分けているから、子どもたちは、つき合い方を、覚えなくておとなになってしまうのです。

### ◆「ろう」について

ろうというのは、耳の聞こえない連中で、耳が全然聞こえないと思われるかもしれませんが、たとえば大塚のろう学校に行くと、全然聞こえない者は、学校の中で、百人のうちふう三〜四人しかいないんです。ほかは、みんな少しは聞こえるんです。しかし私どもの話す言葉は、聞こえない。人間の耳の聞こえる最大の音は、たとえばジェット機のバースというのから、うんと小さな音までですが、その子たちは、音を大きくすれば聞こえるんです。汽車なんかのバツというのは、まっ先に聞こえます。低い大きい音は聞こえるけれど、われわれがしゃべっているのは聞こえない。子どもの時からそうなんです。言葉をしゃべることを覚えないうちからあ者は手まねになる。当然そうなるのです。人間の耳に聞こえる音の聴力図というのがあって、図に示せます。

ピアノの一番左側の低い音、ブーンというのと、一番右のピン

というような高い音は、感じ方が違うんです。年をとってくると、だんだん、ピアノの右の方から順番に聞こえなくなるんです。耳が遠くなるということがあります。「うちのおばあちゃん、どうやら近ごろ耳が遠いようだ」なんて話していると「そんなことありませんよ。私、よく聞こえていますよ」なんていわれてびっくりしちゃう。案外ボソボソいっているのが聞えるんです。それを、ささやき声でいうと大体聞こえないんですけどね。そういうのも高い方の音がよく聞こえないんです。ローマ字で *Old man* と書くと下線を引いたところが、聞こえないで「おあーちゃん」というように聞こえるんです。

もしこういう状態だと、補聴器というイヤブリスを耳に入れて、ポケットにたばこ位の大きさの機械を入れておくと、音を大きくしてくれるんです。

赤ちゃんは、生まれたばかりの時から「バア」だとか「ウーンよしよし」なんて、いわれて育つんです。一年間さんざん言葉を聞かされて、はじめて、「ババ」とは親父のことだとか言葉がわかるようになるのです。ですから、こういう聞こえない赤ちゃんは、生まれて最初の一年間に聞いた言葉は、この子の聴力では入りませんから、あやしてもらっていても、その子は、あやしてもらっていないのです。全然聞かなかったのと同じです。だから、満一歳になっても、言葉がわかるようにならない。「ババは？」といっても「ニヤッ」としている。ところが大部分の親は、赤ち

やんの前で「パパは？」といって、赤ちゃんが「ニヤッ」とすると、こっちが何をいつていたか忘れて「ああうれいしいの」なんていうことになる。この子は言葉がしゃべれないんじゃないかなどという不安をもたない、気がつかないのです。だから、二歳位になつてものをいわないということではじめて気がつくのです。ところが、二歳で気がついてても、もうまる二年損をしているわけです。それから補聴器をつけても、うまくいつても二年遅れでしかないんです。

ろう学校は、六歳から入れます。東京あたりでは、幼稚部に三歳から入れますが、三歳から入つてろう学校に行くと、学力をみると、平均すると、小学校の四年か五年位。せいぜいよくて中一ぐらいです。三歳で入つてきて、はじめて、世の中には言葉というものがあるのですよ、と教えられるのです。世の中の人は、何か、顔を合わせると口をバクバクしている。ニヤニヤしたり怒ったりしている。ふしぎなもんだなあと思つていたんですが、その時、音が出て、意思の交流をしていたなんてはじめて知るわけです。そういうわけですから、だんだん追いつきにくくなるんです。

どうすればよいかというと、何が起るか注意するのです。赤ちゃんが、むやみにおとなしいと思われる。まあ、泣いたり、手足も動かしますが、自分で声を出して、一人で楽しむということをしなないのです。生後四ヵ月から九ヵ月のころおもしろい、珍し

い音とか、ものを見ると、「バツ」とそっちを見るという行動が、非常にはつきりあるんです。たとえば、抱っこしている子の頭のうしろで、紙をぐしゃぐしゃすると、たいていは、ハッキリふり向いて見ます。八〜九ヵ月になると、どの方向から来る音もすぐ見つけます。気がつきにくいものですが、ちょっとこの子、耳が聞こえないんじゃないかと思つて見るのが大切ですね。この時期に誰か慣れた人が見てくれば気がつくんです。赤ちゃんが生まれたら、四〜九ヵ月の間に、そういう修練をつんだ人が、耳の反応をみるといいんです。そしておかしいとわかったら、その時補聴器をつけてやる。まだ、はったり、おしめをしている子が、背中に機械をつけて、両方の耳にしています。耳は二こありますからね。日本では、経済的な理由で、一つしかくれませんが、イギリスなんかでは国は貧乏でも大体二つくれます。

四ヵ月位で補聴器をつけると、言葉の大半は聞こえるんです。一部は聞こえないかもしれませんが。「バアー」というのが「ウアー」位には聞こえる。聞こえると、「ウアー」なんていう子になるんです。そうして、ろう学校で「ウアー」じゃなくて、こうですよ、こういう音も入っていると教わるのです。発音の仕方を教えるということは、そうむずかしいことはありません。これは、全然世の中には、言葉があるなんていうことを気がつかないで過ぎてしまうのとは、大変な違いです。この時期に発見できずに、三歳でろう学校に入り、そこではじめて言葉の教育を受け、

言葉を覚えると同時に、勉強も習うとなると、結局は、学力が中学一年、あるいは小学校四年程度のおとなになるのです。普通の成人とつき合ったことのないふしぎなおとなができるわけです。

以前そういうおとなたちの収容施設に五年ばかり勤めていましたが、そういう人たちの楽しみはというと、結局、世の中の普通のおとながしているようなことをしたい、洋服なんか最新流行のものを着たくてしかたがない。働くこともできますし、身体的には正常ですからみんなと同じようなスカットした服を着て、喫茶店に入ったり映画を見たり、そういうことが大好きです。そして、大体が、洋画を見るんです、日本画はよくわからない。洋画は字が出ますし、わかるんですね。そして、なるべくしゃべらなくてすむようにしている。道で誰かに会ったり、人から、「もしもし、ちょっとおうかがいします」なんていわれると大変困るのです。切符なんかも、買う前に字を書いたりしています。いって、わかってもらえない。驚かれてしまう。ろう学校で習った通りにやっても、通じないんです。ろう学校の先生はわかりますから「よくできました」なんてほめられて、いい気になって卒業するんです。そして卒業したとたん、そういつて、駅員に驚かれてしまう。今は、便利になっていて、しゃべらなくても、切符が買えるようになってるので、小銭さえもっていれば、大丈夫で、外出も楽になったようです。

この人たちが困るのは、しゃべれる連中に、言葉でしゃべられ

た時ですね。手まねをして「私はしゃべれません」というと、相手は、うんとびっくりするか、全然わからないかどっちなんです。そして、しゃべれる人は、全然手まねを理解してくれないのです。ろうあ者のいうことは、わかっていないんですね。そして自分たちは、しゃべれる日本語をべらべらいつている。それは、ろうあ者には聞こえないのですから、もう何といっているか、厚い鉄のようなものの前に立たせて、くやしかったら乗り越えろ、くやしかったら言葉がわかるようになれ、しゃべれるようになれと世の中の人が要求しているんですね。しかし聞こえなかったら覚えられないのですから、ろうの人なんてかわいそうです。自分がわからないことが要求されるでしょう。「けっこう、けっこう」といわれて、ろう学校を卒業して、社会に出て、切符を買いおうと思って「し・な・が・わ」といつてみても切符がこないのです。なんだか、だまされたようですね。よく聞くと「しながわ」と発音はできているんです。ただ立派な背広なんか着た若い人が、窓口で、気が狂ったような声を出すので、むしろは、たまげてしまうのです。

ほんとうに、ろう児が、みなさんの仲間について、自分の子どもだと思えば一番いいんです。その子どもが幸せに暮せるようにしたい。何をしたらよいか考えるんです。アメリカ人はそうです。一歳までに発見して、補聴器をつけて、言葉がわかる、聞こえる状況で育てることが必要であれば、金をそれにつきこみたいとい



う。だから、百万ドル使っていいといわれて、そのうち五十万ドルをそれに使い、残りの五十万ドルは、ろうでない人に、ろうの人とつき合ってもらおうことを知ってもらうために使いたいといっています。

何日でもよいから、ろうの子を普通の幼稚園に入れなさい。そのために、普通の幼稚園が、被害をこうむるとか、めんどろみきれないとか、いつ外に飛び出してしまうかわからないとか不安があったら、その子に専属に先生をつけましょう。その費用は、政府が出しましょう。そういう体制にして、なるべく手を出さず、普通の子と同じようにするのです。デンマークなんか、一生懸命国として応援してやっていますね。ろうだったり、盲だったりしますと、二歳の時、もうおかあさんが、目の見えない子や、補聴器をつけた子どもを、保育園へ連れていく。そして、他の子どもたちが、遊んでいる中を、ふらふらしてるんです。みんなが、ピアノのまわりで、歌を歌っている時、ろうの子どもは、うしろにいて、うたっている子の顔を見たりしてるんです。一般の人間の子どもが、どういう暮しをしているか、どういう遊びをしているか、どんなことを楽しんでいるか、なんとなく、はだで感じるだけでもその子たちにとって得になるんですね。

その保育園で、「それではみなさん、歌を歌いましょう」「あややっぱり、あのつんばはやっぱり歌っていないね」そんなことはいわないで、その子が歌っている子どもたちの間を歩いて、

顔を見たりしていて、みんながキャーキャー喜ぶとニヤニヤしたりしているだけで、その子のためにはなっているんです。他の子どもたちが、耳の聞こえない子は、こんなもんなんだよ。うしろからね、「なんとかちゃん、あぶないよ」と呼んでも、こっちを向かないんだ。だから、急いで肩をポンとたたいて「あぶないよ」というとすぐわかるよ。そういう術を覚えるんです。その子とつき合う方法がわかる。ろうの子は、普通の子がいうのをどのようにキャッチすればよいか術を覚える。「ハァー」と見ていると、その子が指をさすから、そっちを見るとか、いろいろ頭を働かせるとかして、こんなこといつているんだろうとわかるんです。からだでそういうことを感じるようになる。そうすると、いっしょに小学校へいっても、あまり困らないで、先生がベラベラといっている間に、先生がこうしろといっているんだとか、自分のノートを見せてカンニングをさせたりしています。普通の子にカンニングのさせ方、ろうの子にカンニングのしかたを教えれば困らないのです。そして知能によつては、大学を卒業していくのです。

先生が「きょうは、脳性マヒの話をします。」といつても、ろうの人にはわからない。わかるわけがないのですが、その時、指さしたり、わからないから書いてくれないかと、小さいころから、そういうことをしていれば困らないのです。なにしろ聞こえている連中とつき合ったことがないともう困ってしまうのです。困ることがあると、昔のろう学校の先生の家へ相談に行く。だから、日

曜日になると、いっぱい来ちゃう。そこが、オアシスで、そこに行くくと自由に手まねができるんです。そして、みんな喜んでうれしがつて聞いてくれる。それが町で、一発こんな手まねをする、と、まわりの人が、ちょっとバカじゃないかといって、見るでしょ。だからおっかなくてしかたないから逃げているのです。どうしようもないですね。

親たちが、びっくりして、小さいうちから、訓練、訓練、発音練習しなくちゃと、一生懸命やって、近ごろ「おっあーさん」といえるようになった、けっこう、けっこうと喜んでいる。しかし、結局、まわりの人が「おっあーさん」も「あっ、そう、おかあさん」と聞いてくればそれもよいのです。それが、普通のおとなは、ろうあ者だとわかったとたん、もう聞く気もちななかないんです。ろうあ者なんか気もちわるい、つきあいたくないと思っていれば、せつかくいっても聞いてもらえないのです。特殊な訓練だけをして、普通の子どもと遊ぶ機会もないし、普通の保育を受ける機会もないと、普通の子どもたちと、どうふるまっていかわからない子になってしまうのです。

十八歳になって初めていっしょになる。十八歳になったら、慣れている仲間だっているいろいろな遠慮するのがでてるのですから、全然会ったこともない人にバツと会って、「これが、おまえのところの工場長だ、この人のいうことを聞いて働きなさい」といわれても困ってしまいますね。「これどうしたらいいのかなあ」と

思っても、ちょっと聞けそうにないので、多分そうだろうと思っ  
ていい加減にやっちゃうんです。すると、工場長が見て「だめだねエ。ろうあ者はこういうでたらめをやって、これで会社は何千円損だ」とか、その人に直接いわないで、ろう学校の先生に、こういうのは困るといいつけるんですね。目の前で「こういうのは困る。全然でたらめなことをして、こういうのは社会性がない」といい、結局首になって他の所へやられてしまうのです。それが、たび重なつてくれば、自分は、だめな人間で社会適応が悪いと思ってしまうのです。

そうすると、何か福祉対策を考えると、ろうあ者連盟が自民党に陳情に行ったりする。そして、自民党が、ろうあ者コロニーを作ろうという。すると、そのコロニーには、普通と同じ洋画の映画館があるか、喫茶店があるかなんて聞くんです。こういうのは、町に行かなきゃない、という、それじゃおれは入らないというのです。コーヒーを飲みに行ったり、ものをいわなくてメニューを見せてそれを飲んで洋画を見て帰るのが、幸せなんです。「どちらもないけど、ろうあ者の天国です」といわれても、本当は、うれしくないんです。本当は、みんなといたいと思っ  
ています。電車に乗ってすわっていれば隣りに女の子がすわったりして、「まさか、おれがろうあ者だなんて気がつくまい」と大変いい気持になっているんです。もし気がつかれたら、大変だ、という気持がいつもある一方、「自分はちつともおかしくない普通の

おとなだ、文句があるか」という気持ちもあるんです。それなのに、もうこの世の人でないような生き方にさせたのは誰か？

特殊な訓練、特殊な子どもだから、特殊な訓練が必要だと、特別なところに入れて、特別な人間に仕立てあげてしまった人たちです。よく見ると、その子は、初めから、ただ耳が聞こえない普通の赤ちゃんであつたのに、それが、いわゆるろうあ者というレッテルが貼られて、まるで、人間の子でもないように扱われちゃうのです。そのように育てられるのが、今の社会です。その始まりは、幼稚園ですからね。

幼稚園の先生とか、保育園の先生とか、子どもの世話をする専門職で、最初に、その子に出会う人は、その子どものことだけ考えて、その子の特殊な訓練を十八年やって特殊性をなくしてしまおうなんて思ったってだめなんです。ろうであつたら決してなれるものでない。脳性マヒだったら、脳性マヒというのは脳が作られてくる間のことから、なおるなんていうことはないのです。病気がないんだ。そういう子どもなんだ。足が一本ない子どもはずっと、足が一本ないんです。足が一本ないから、もう一本はえたようにしなくちゃいけないから義足をつけて動くようにして、まるで、足があるかのように見せかけている。「十八年訓練して、とうとうこの子は足があるかのように歩けるようになったぞ」なんていっている。ところが、この子は、世の中の足の悪くない人ときき合ったことがないようになっていて、足があつて

も、世の中に適応できないようなおとなになっている。一方、足がなくても、うまく適応できるおとながいっぱいいるんです。

ろうに関しても、脳性マヒで申し上げたような同じことがたくさんあるんです。ヘレンケラーは、ろうで全然聞こえなかったけど、大変立派な社会生活をしていましたが、ろう学校を卒業していません。まったく耳が聞こえないけど、普通の小学校に行っている子が、今、東京で一ダース位います。その子たちは、幸い赤ちゃんの時は聞こえていて、三〜四歳で結核性脳膜炎で、ストレプトマイシンを背中にうったら、耳が聞こえなくなり、全然聞こえないんです。その子たちは、幸い、最初に幼稚園に入っていて、病気をしたので、まったく聞こえなくなっただけで、次の年の春には、歩けるようになって幼稚園に行くと、先生が「ああ、なんとかちゃんよかったね、生き残って」というんです。「耳が聞こえなくなったから幼稚園はだめですよ」なんていいにくいからです。

この前までいたから、おじぎだとしてくれて、本当に、言葉がわかっていないんじゃないかと思うんです。しかも、子どもは人の顔を見ていて、けっこういうことがわかるんです。大体幼稚園の先生のいうことなんか決まっていますからね。「○○ちゃん、おはよう。きょうはよいお天気ですね」というだろうと思って「おはようございます」なんておじぎをすると、おや、この子はわかるのではないかと思うんです。今にしゃべれるんじゃないかと

思う。聞こえると思つてやっている、だんだん普通の子どもと同じと思えるようになるんです。ただおかしいことに「○○君」といってもこつちを向かないことで、それが困るくらいで、あとは普通です。よなんて、幼稚園の先生が固くそう思つていて、そういうと、小学校でも、教育委員会が、幼稚園の先生が二年見ていてそういうのだから、入れてみたらどうだいということ。普通の小学校に入ります。そして、幼稚園からいっしょにあがってきた子がみんな、カンニングで、その子に教えるのです、その子もみんなを見ていて、みんながサーッと向こうへ行くので、自分も行ってみたり、わからなくなった時は、まわりにちよつと気を配るでしょう。耳が聞こえないけど、そういう生活の知恵があつて、けっこう普通の小学校でやれるのです。宿題もよくやります。すし、試験もできていましたと、大体において評判はよいのです。そして、結局、大学にスツとパスしたりします。そういう人は、普通の学校を出たので、仲間がいっぱいいるでしょう。ピートルズみたいなグループを作つて入ったりしている。補聴器をつけて、なにか音がブンブンといっているのがわかるのです。

ところが、ろうあ者は特殊だと、職業訓練所や、ろうあ者施設を作つて、せつせと訓練したつて、だめなろうあ者だっているんですからね。普通に育つた子は、仲間といっしょに髪を長くしたりして、ギターを弾いて楽しんでます。就職といえ、あつちにも、こつちにも、友だちが何とか自動車修理工場にいるとかい

つて、そこで使つてもらふといつて行くのです。すると、お前は、器用だからエンジンの方をやつてくれとか、社長さんも、小学校からの仲間と知つていて、あいつは、耳が聞こえないけど、学問はあるんだとか、電気のこと詳しいとかいろいろ知つていて、気やすく使つてくれるのです。ところが、普通の自動車修理工場に、「一人、とても優秀なろうあ者がいます。手も器用だし学もありますから、使つてみてくれませんか」といっても、「ろうあ者ですか、それは困るな。ちよつと位足りなくてもいいから、普通のにしてくれ」といわれるのが常識ですね。どこへ行つても受け入れてくれないので、不適応をおこして、まわりの人とまづいことを起こす結果になる。

すると政府は、ろうあ者の成人のために、福祉対策を立てなければといひ、いろいろ施設を作るのです。一生、そこで暮らすことになるろうあ者もいるんです。うちの家族の構成員みたいに、あなた方も、日本の国民、何とか村の住民として将来とも私たちといっしょにやりましょうというプログラムが最初からあればいいんですがね。ろうあ者といつても一風変わったところがある、実におもしろい普通の人たちなんです。ところが、世の中は、そうじゃなくて、だんだん普通じゃなくしているんです。特別な施設などを作つて、そこに入れば一番の福祉だと思つてい

## ◆知恵の遅れている子どもで、言葉のしゃべれない子どもについて

幼稚園の入園テストをすると、「オタ、カナ」「テ、エ、ビ」などが、まだ発音できていない子がいます。幼児音をしゃべる子どもが、どういうふうになれば普通にしゃべれるように育つかというと、まず幼児音でない、ハッキリした発音を、現実の場面で、鮮明に聞かされる場面が多くなるといいのです。すいかの「す」

「あっ、ぼくのすいか」とかたびたび入ってくる方がいい。一方、自分でかっという機会が多いとよいです。しゃべっている時間だけが言葉の練習時間になるわけです。しゃべらない時間は、発音の練習にならないんです。みなさんの英語がちつとも上手にならないのは、そのためかもしれません。

朝から晩までなんでもいいからしゃべっていけば、一カ月でもう少しよくなるかもしれません。しゃべらないと言葉は直らない。子どもにとって、一番聞く機会が多くあって、しゃべる機会が多いとすると、それは、他の子どもたちと遊んでいる時とか、幼稚園の遊び時間なんかです。だから、幼児音をもった子が、幼稚園に入れてもらえば、うんと得をして卒業するのです。入れてもらえないと、それをさせてもらえないのです。

十分よくしゃべれて、言葉も普通の子は、そのままで順調に発達するのです。六歳になれば、普通の小学校に行くのです。普通

の子でも幼稚園に行けば得をしますが、この子たちと比べたら問題にならないぐらいの大きなんです。本来に、お茶大幼稚園に入る時に優秀だったら、幼稚園に入らなくてもいいくらいのもんです。最も保育を必要としている子どもから最優先で入れる、耳が聞こえない子どもは、聞こえる子といっしょになることが大切だから、一番に入れる、それが理屈にあっていますね。児童科の先生はみなこういうことをいうから嫌われてしまう。

## ◆どもりについて

親が「どもりだ」と思って騒ぎ始め、本気になって心配すると本当のどもりになるのです。なんだかうちの子は、近ごろいい方があわてているねと、親がたいして気にしていないと、同じようにどもっている子どもでも本当にどもりになっていかないという傾向があるんです。近ごろそれがはつきりしてきました。ほとんどすべてのどもりは、二歳と四歳の間で始まります。幼稚園の三年保育で、最初の年の二十〜三十人に一人位は、「お、お、お、おかあさんがね」という。すると先生が「これは、どもりだ」と心配しちゃう。心配すると、その気持が子どもに反映して、先生、なんだか深刻な顔をしてよくのこを見ている、自分が好きじゃないんじゃないかと思って、だんだんまずくなるんです。その先生の近くに行くと、うまくいわなきゃいけないんじゃないか、先生をギョッとさせないようにしなきゃとか気をつけたりす

ると、本当におかしくなるんです。子どもにとって先生に好かれることが一番の幸福ですからね。気をつけるとまずくなる。すると「これは、どれもじゃないか。どもりのはじまりだ」といって過大視する。

その子のその他のことを全部忘れてしまつて、どもり始めたことだけが、自分の頭にあつて、先生も親も関係者も、どもりだけが見えて、その子どもが見えなくなつた時、その子は、本当のどもりになるのです。一般的にいうと「この子は、本当にいい子だな」と思っているといい子になるんです。だから、幼稚園の先生に一番大切なことは、子どもを見て「本当にいい子だね、この子は」と思えることでしょうね。本当にどもりだと思つてもどもりになるんです。

### ◆口蓋裂、三つ口について

口蓋裂というのは、口の天井が全部さけていて、三つ口なんかといっしょにおこります。口の中の構造が違ふので、言葉を覚えられないのです。でも幸い、近ごろは、しゃべり始める前に、手術して、口蓋裂がない状態と同じにできるようになりました。医学的処置をやるべき時にやりさえすれば、問題が起りません。これからは問題にならなくなるでしょう。

それでも親が迷つて、口蓋裂、三つ口を過大視して、何とか早くなおしてくれないか、もっとよい医者はいないか、もう一度手

術をしないおしてください。もっとよくしてください。といって、何べんも、切ったり、はつたりしているうちに、だんだん上のくちびるがなくなつて上顎が発達しなくなるのです。

この子、三つ口だけとかわいいんですよ、笑うし、えくぼできるんですよ、といって、もし十歳まで親が待つてくれたら、十歳になると顔もすっかりするので、その時、一発きれいな手術をすると三つ口だったのがわからないくらいきれいになるのです。ですから、子どもは本当はそうしてもらいたいのではないですか。子どもに、「いつ手術しますか」なんて聞いたら、赤ちゃんがもししゃべれるとすると、「ちょっと待つてください。おっぱい飲んでから、ゆっくり考えますから」なんていうんじゃないですか。それが生まれると、すぐ親の意見で、かわいそうだからすぐ手術をするということになる。今、おなかですいてる方が、ずつとかわいそうなんです。過大視すると、たいていまずいことになるんです。どんな重症心身障害であろうと、精薄であろうと、この子には、こういうことがあると思つて、その子なりに扱っていると、普通の子どもがやっているような状況を全部与えることが大切なことがわかります。その上で、この子には、三つ口という問題がある、それに対してはおいおい考えていこうということがいいですね。

### ◆子どもが求めていること

発達異常があると、そこに目が奪われてそのためにその子のほかのことが、全部犠牲になってしまい、なんか福祉対策の対象のように考えられてしまうんです。

ハンディキャップというのは、みかけ上のことでは、はかれないものです。それをまわりの人や本人がどう思うかによって決まるのです。見たところすごくても、まわりの人や本人がそう思わなければ、ハンディキャップとしては存在しないのです。まわりの人がどれくらい過大視して、大騒ぎするか、また本人がそれをどれだけ苦にするかによって、問題の大きさは、決まってくるのです。

この子たちがいちばん求めているのは、どんな異常や変わったところがあっても、そういう個人差をもつ一人の子どもとして、その状態を全面的に受け入れて、障害の有無によって差別したりしないで、普通の子どもの場合と同じように人として認め、その子の成長に必要な保育の機会を用意し、人としてのその子を育てていこうという姿勢をもった保育者なんです。どうぞよく考えてみてください。障害があってもなくても、子どもとして必要なものは必要なんです。障害があるというだけの理由で、それさえ与えないどころか、かえってそれを剝脱してしまうようなことを、われわれはいままでしばしばしてきていた、ということではないでしょうか。

(現職研究会講義)

